

報



會

會 岳 山 本 日

62

月二十年一十和昭

一發の實彈

二十五年も前の南極探検當時の事情を、直ちに今日の登山界に引照することは、いさゝか唐突の感がないでもないが、併し、その間には幾つかの興味ある問題を看取することが出来る。

例へば二十五年前の南極探検が、かなり廣範圍の社會的關心を喚起しその結果、今日なほ驚嘆に値するやうな大掛りな後援組織を備へ得たにも拘らず、その關心が、遂にその場限りのものに終つてしまつた事實などは、今日の我々に一つの大きな問題を投げかけてゐるのである。

『百發の空砲は一發の實彈に如かず』といふのは、この探検隊を芝浦に送り出した時、大隈侯が一行に饒した言葉であつた。しかも實彈は遂に一發にして終り、これに續く第二第三のものなく、空砲の響すらも聞くことが出来なかつたのは何故であらう。我々には相當この事實を反省して見る必要があるやうに考へられる。

南極がアムundセンによつて到達されたことは誠に事實だ。しかし、それを以て日本人が探検すべき分野がなくなつてしまつた譯ではない。南にも北にも、又アジアの大陸にも我々を待つ未知の世界は決して少くなかつたのであるのに、南極探検の

一回の試みを以て我が國の外地探検の熱が消失してしまつたのだとすれば、當時一世を風靡した南極探検熱も、實は單なる國際的の對抗意識といつたやうなものに刺戟された一時的現象であつて、探検自體に献身し關心した人は極めて少數であつたと言はなければならぬ。

ナンダ・コット登攀は二十五年前の南極探検と大いに異なる環境の下に遂行された。社會的には南極探検に比しより少い關心しか喚起しなかつたとしても、此の試みを以て、我がこととして案じ、又その成行を以て我がこととして喜んだものは決して少くない。大隈侯は開南丸に乗つて南極に出掛けることが出来るやうな人ではなかつた。後援會の主腦部は勿論、後援支持した殆んど全部が此の資格を缺いてゐた。彼等はあく迄も後援者の立場を超えず、従つて彼等と探検隊員との間には、超えることの出来ない間隙があつたのである。謂はゞ後援者の間からは第二、第三の實彈となつて飛出し得る者が缺けてゐたのである。此の意味からすれば、ナンダ・コット登頂が喚起する波紋は、南極探検の比ではないであらう。たゞ併し、我々は我々の直接の周囲を見ることによつて、一般の日本の社會に對する觀測を誤ることが出来ない。探検とか海外遠征とかいふものに關する日本一般の興味が、二十五年以前に比し、實際どれ程の進歩を示したかを確實に測定す

ることは、大規模の遠征が何等かの形に於いて社會的の意味を持ち、且又社會的支持なくしては實行され得ないといふ事實に鑑み、必要と可らざることを考へられるのである。そしてその上で我々が、なすべきことがあれば、直ちに着手しなければならぬのである。これなくしては一つの實彈は矢張り一つ限りの實彈として終る虞があるであらう。

第二の問題は登山者社會内部の陣營の整備である。遠征が如何に多くの要素を含み、如何に多方面の準備を必要とし、且又、現地に於いても如何に多くの維多な任務を負はされてゐるかは、我々の夙に充分覺悟してゐたことであるが、今回の立教隊の経験によつて、我々は益々此の方面についての認識を深めることが出来た。ナンダ・コット登頂の成功は我々に絶大な希望を齎したと同時に我々が數多くの事柄について深い考慮を強ひられてゐる事をも教へたのである。我々としての急務は第一に陣營の準備であり計画的な訓練と綜合的研究ではないであらうか。第一の實彈に續く第二第三の實彈を總掛りで養成することではないであらうか、綜合は必ずしも強力を意味しない場合もあることは事實だ、併し我々の前に横はる問題は、日本山岳界が全力を擧げて専念してはじめて満足なる解決を見出し得る程、大きいのではないであらうか。

近著の『アルバイン・ジャーナル』を見るとナンダ・コット登攀について左の如く書いてある。

『ガルーワールに登山中の日本隊はナンダ・デヴィの南東に當るナンダ・コット二二三〇呎を試み、第一の試登には失敗したが、二度目には成功したと傳へられる』

僅に三行の簡單なものだが、書いた人は相當に色々のことを考へて筆をとつたことであらう。何となれば何といつても、ナンダ・コット登頂の値打を本當に知つてゐるのは、矢張り日本に居る我々よりも、ヒマラヤを知る彼等であるからである。就中會つて此の頂上に肉迫したロングスタッフこそは、最もよく立教隊の業績の價値を理解する一人であるに相違ない。アルバータの初登攀の意味を本當に認めることが出来たのが、スタットフィールドやバーマー、ソリントンであつたやうに。

山の世界に我々が先蹤者に負ふ所は實に大きい。殊にヒマラヤに於いて我が英獨の登攀隊から學ぶ所は多い。併し我々の間にもヒマラヤ登攀の眞の意味を評價し得る人々が輩出することこそは望ましい。僅に三行の記録から、その山の形貌を眼に浮べ、居乍らにして登攀隊の苦闘を十二分に想像し得ることが出来る人が輩出する時、ナンダ・コットの登頂は初めてその歴史的使命を充分に發揮したことになるのである。(石原)

「南極記」その他

島田 巽

小集會での白瀬中尉の回顧談を開く前後、必要あつて少し當時の記録などを讀いたが、吾々にとつては幼少の頃の事でもあり、色々の點で面白いことが多かった。

この時の南極探検については可成り色々な書物が出版されたやうであるが、公式の報告書は後援會編纂の本文四百六十八頁といふ大きな「南極記」(大正十二年二月發行)で、その他には書記長多田春樹氏の「南極探検日記」(大正元年八月發行)白瀬中尉の「北極より南極へ」(大正十年十月發行)等がある。

「南極記」は多田書記長の日記等を中心に補筆され、學術報告、寫眞、地圖等を添へ當時としては完備した探検報告と稱されてよい。

そこへ行くと白瀬中尉の「北極より南極へ」は冒險實譚と銘打つてあるだけに武勇傳として物凄いのもの如何にも中尉の面目躍如たるものがある。この本は本文百二十六頁のところへ附録百三十六頁といふ體裁で、その附録が中々面白い。

探検出發前の諸名士の激勵文、後援説を再録し、また都下劇場で演ぜられた後援同情劇、新聞紙上への投書等を蒐めて掲載したもので當時の雰圍氣がわかつて興味深い。

大隈老侯はじめ大石正巳、三宅雪

嶺、佐々木安五郎、島田三郎、福本日南等當時の雄辯家を網羅して居るのだから後援振りも物凄いの。

「彼のイサベラ女王がコロンブスの爲めにダイヤモンドを賣つて船を建造したるは千古の佳話であるが、今幸に茲にコロンブスたる白瀬中尉を得たが、イサベラ女王は何處に在りや。ああコロンブスは来れり、イサベラは出でざるか、イサベラは出でざるか」とは佐々木蒙古王の名調子であるが、明治の青年の劍舞的な熱狂振りが偲ばれる。

當時の遠征が學術班を同行して相當の効果を収めた反面に、非常に唯心的な、熱情一點張りの氣分があつたことが觀取される。これは後年出版された本であるが、當時の島事務長の筆に成る「南極探検と皇太神宮の奉齋」と云ふのがある。(大正七年三月執筆、昭和五年九月發行)島氏は其後戸隠神社主典となつて居るのでこの標題のやうな書も生れたわけであるが、「エドワード七世州の東北端の一山上に登攀して、こゝに皇太神宮を奉齋して、一行の上陸することの出来たことを報謝する」とも

に、我が皇室國家の隆昌安泰を祈願したのであつた。」といふ序文中の一節などにも當時の隊員の氣持の一傾向を見ることが出来る。

今どこかへ探検隊が出發すると云ふことがあれば、やはりこれに似た浪漫的興奮、日本精神的興奮が起るには違ひないが、明治時代のは何と

云つてもデユスチュアが大掛りだ。

この南極探検隊の規約が白瀬中尉の著書に掲載されてあつたからこゝに再録して見やう。

「白瀬中尉の南極探検には要領左の如く申し合せたり。」と云ふ前書きで以下のやうなものである。

今回の南極探検は世界列強の間に於ける試験的競争の探検旅行に付我等の一舉一動は直ちに世界の視線に上り、帝國國民の品性及資質に關するを以て徹頭徹尾同心協力堅忍不拔の不動心に任じ各自精力の有らん限り盡し、以て南極地に突進し、僅少なる經費に切り詰めたる設備と小規模の一行たるに不拘、列強に率先し我が國旗を地軸の極點に觸し、模範探検の實を世界に示し併せて我大元帥陛下の萬歳を地軸の頂點に三唱せんとす

一、同行者は出發より歸還までの間總て隊長の命令に絶対服従すること

三、隊長の命令にして萬一不當と思惟するときは其理由を篤と尋べき事

三、同行者は一致協同誠心誠意を以て極地到着の目的を達せんがために各自の任務に勤勉努力すべきこと

四、乗船中時宜に依り船長の依頼ある時は探検者一同之に應じ船員の助手たるべき事

五、乗船上陸中を論ぜず同行員一同は天涯萬里無人の水郷たるを腦裡に會得し糧食に注意し故なく缺乏を致さざる様心掛くべき事

六、カラフト大は極地到着の目的を達する最も重要な武器に付き各自愛撫心を以て懇切に取扱ふべき事、但し大係として山邊、花守の兩カラフト人を同行すること

七、同行者は出發後乗船上陸中を論ぜず飲酒を嚴禁す、但し極地到達後歸途途洲又は新西蘭よりは飲酒隨意たるべき事

八、同行者が出發後歸還まで家郷又は友人に發送する書狀又は郵便物は密封前隊長の一覽を経べき事但し郵便物は除費支辨に付隊長附屬の事務員に差出すべき事

白瀬中尉の話では飲酒を禁ぜられた一行の大部分が皆相當の豪の者で燃料用に石油の豫備として携行したアルコール二百圓ばかりが、歸路、連中の胃の脘に收容されてしまつたといふことである。郵便物の檢閲なども故國に後援會あり、無數の同情者ありといふ事情なので隊員の行動を誤傳されないための要心からであつたらう。

(六)のカラフト犬云々の條が、中尉の著書初版では「馬匹」云々となつて居る。始めは馬を南極に進めるつもりであつたのかと思はれるが、果してどうか。

この南極探検の事蹟が世界的に報告されたのが、日本人によつてではなく Ivar Hanne といふ諸威の極地學者であつたことは不思議である。

これはゾオグラフィカル・ジャーナル一九三三年十一月號に掲載されたもので、筆者は原田三夫氏編輯の「南極探検」及び後援會編纂の「南極記」によつて當時の記録を記述したもので語學の障壁を突破した苦心は賞さるべきである。

この書の抜刷りが白瀬中尉の手許に送られて、しかも漢字で筆者の署名が入れてあつたのには驚かされた。しかもこの一文が相當のまとまりを見せて居るのにも感嘆させられた。この諸威の學者は次のやうな言葉でその文を結んで居る。

「南極探検としての白瀬探検隊は所期の目的地へ十度足りなかつたことを以て云々されるべきではなく、これが日本の探検として、何等過去の經驗に立脚せず全全然新しく企てられたと云ふ事實で批判されるべきだ。過去の經驗といふものは他以上に極地では重要なものだから。そしてこの點に於て一九一一年—一二年に渡る日本の活動は、其後繼續されなかつたが南極史上に重要な一地步を占めるに値するものである。」

白瀬さんではないが、知己は何處かに居ると云つた感じで私はこの一文を讀んだのであつた。そして

“Up till now left rather blank...”と書かれた通り、二十五年間途に後繼者を出さなかつたことが惜しまれ

ました。

白瀬中尉講演會

(十一月十二日、於三會堂)

我が南極探検二十五周年を迎へて、日本の社會一般に當年の探検隊の業績を再検討しようといふ氣分が濃厚に起りつゝあることは否定出來ない。二十五ヶ年の長きに亙り、白瀬中尉一行の事業が祖國に於いて正當な評價を與へられなかつたといふことは、決して日本の名譽ではない。特に、白瀬隊の業績が海外に於いてより充分に認められ、より眞面目に研究されてゐるに於いて然りである。

白瀬翁を招じてその物語を聞き度といふ念願は決して昨日今日に始まつたものではないが、此の十二月二十日には二十五周年の記念碑の除幕式が行はれやうといふその時に當り、翁の講演を聞くを得たことは大きな喜びであつた。演題は

「兩極探検の思ひ出」

といふもので、謂はゞ翁の探検家としての一代記ともいふべきものであつたが、興味も深く、教へられることも少くなかつた。講演速記は、相當の分量に及ぶ註と共に、山岳第二號の巻頭を飾る筈であるが、その後白瀬翁からの書翰によれば、

「老生も最早老境に陥つたためか往年屋根より墜落せし際右肋骨の處に打撲傷を受け、當時重傷であつたのを元氣に任せその儘放擲してあつたのが、今回三十年振り

に突然痛み出し、俗にいふリユウマチとか申す氣味にて腰部手足等こわばり起居も人手をかりる様な状態にて、七十六歳になつて始めて病氣の初歩に遭遇した譯であります」

とある、あとで知つた話であるが、講演會當時も相當その腰が痛まれたとのこと、翁の好意を深謝し、一日も全快の早からんこと祈る次第である、

當日の來會者左の如し

岡田 喜一 大澤 照貞 中島 精一
岩崎京二郎 福田嘉四郎 西堀榮三郎
松島 正義 額田 敏 橋本晉七郎
關根 吉郎 中司 文夫 山下助四郎
田口 一郎 石原 巖 福島 昌夫
中村 謙 中村 テル 田邊 主計
行方 沼東三浦 新本多 友司
太田喜久雄 吉田 竹志 外山 義夫
辻 莊一 吉澤 一郎 村尾 金二
近藤 恒雄 武田 久吉 足立源一郎
柴山登茂次 野口 未延 安田 正介
淺原 重繼 角田 吉夫 茨木猪之吉
松方 三郎 木暮理太郎 高頭仁兵衛
木村 鐵吉 井上 良則 櫻井 信雄
逸見 眞雄 飯塚篤之助 三田 幸夫
金山 淳二 中村 貞治 島田 巽
黒田 孝雄 谷本 弘 林 俊介
今井田研二郎 高橋文太郎 織田 明
渡邊 公平 廣瀬 甚吾 菅根幾二郎
高木 正孝 山内 豊中 石井 鶴三
櫻内 敏雄 中屋 健武 島山 梯成
會員外三〇名

南極探検隊事蹟概要

(記念碑碑文)

明治四十三年十一月二十八日南極探検隊長陸軍輜重兵中尉白瀬以下一行二十七名は二百四噸の小帆船開南丸(元帥東郷平八郎命名)に搭乗し船長野村直吉是を指揮し當時は猶若海たりし此地點を抜し一路南進の航程を起したり狂瀾怒濤を冒し櫛風沐雨航走七十餘日後の翌四十四年二月八日ニュージールランドウエリントン港に到着し休息三日二月十一日紀元節の佳慶を卜して南米洋に向ひ難航更に五十日三月十四日南緯七十四度十六分に到達したりしも既に南極圈内は結氷の時期に入り前進不可能なるを以て一度背進するの止むなきに至り五月一日濠洲シドニーに回航して用船を修復し再舉の準備を整へ十一月十九日シドニー港を解纜して第二次探検の途に上る四十五年一月十六日南極大陸鯨灣頭に上陸し白瀬隊長以下五名の突進隊は直南の氷野を横行して二十八日南緯八十度五分西經百五十六度三十七分の地點に到達し同地點を「大和雪原」と命名し日章旗を樹立し學術的觀測を終へて同年二月四日根據地鯨灣頭に歸還せり又沿岸支隊は殘餘の隊員を以て組織し更に東航して同月二十三日エドワード七世洲に到達し前人未踏の地域に上陸し海陸の探検に従事したり一行は此間「開南丸」「大隈丸」「四水米河」したわし山」等日本男兒に

於て最初の足跡を南極地域に記録し動物植物等の採集をなし極地に於ける航海天文氣象博物等の各學術上幾多の貢獻を遂げ六月二十日此地點に歸航し祖國を仰ぐ。

按ずるに往年歐米探検隊の列に入りて日本男兒の意氣を發揚したる我南極探検隊の事蹟は最近米國南極探検家バード少將に依て其足跡を再確認さるゝあり又近來本邦捕鯨船は續々南米洋に進出し好成績を示しつゝあり往年の獻身的努力が徒爾ならざりし證左たるを信ず今茲二十五周年の出發記念日を迎ふるに際し此碑を建立し一は以て壯烈勇敢なる快舉を後世に傳へ一は以て後進青春の徒に探検思想鼓吹の指針たらしめんと欲す。

維持昭和十一年十一月二十八日

南極探検二十五周年記念會

總裁 侯爵 大隈 信常

委員長 文學博士 三宅雄二郎

第一次並に第二次南極探検從事者

隊長 白瀬 巖(五十歲)
學術部長 武田輝太郎(三十三歲)
衛生部長 三井所清造(三十四歲)
書記長 多田 惠一(二十八歲)
秘書 村松 進(二十六歲)
糧食係 西川 源藏(二十四歲)
被服係 吉野 義忠(二十三歲)
船長 渡邊近三郎(二十六歲)
大係 山邊安之助(四十四歲)
大係 花守 信吉(三十三歲)

開南丸船長 野村 直吉(四十四歲)

一等運轉士 土屋 友治(三十四歲)

機關長 清水光太郎(四十歲)

三等運轉士 酒井兵太郎(四十四歲)

事務長 島 義武(三十歲)

水夫長 井上才次郎(三十一歲)

木工 安田伊三郎(三十二歲)

機關士 佐崎 量平(二十七歲)

舵取 渡邊鬼太郎(二十九歲)

舵取 釜田 儀作(二十七歲)

火夫 杉崎六五郎(三十六歲)

水夫 柴田兼治郎(二十歲)

水夫 福島 吉治(十九歲)

第一次南極探検從事者

一等運轉士 丹野 善作(四十一歲)

舵取 佐藤 市松(三十三歲)

火夫 高取壽美松(三十五歲)

火夫 三浦幸太郎(二十五歲)

第二次南極探検從事者

學術部員 池田 政吉(四十五歲)

寫真部員 田泉 保直(二十四歲)

見習運轉士 三宅 幸彦(二十八歲)

火夫 濱崎三男作(二十八歲)

南極探検後援會幹部

會長 侯爵 大隈 重信

幹事 押川 方義

同 佐々木 安五郎

同 田中 弘之

同 櫻井熊太郎

同 村上 俊藏

同 三宅雄二郎

同 池邊吉太郎

事務長 堀内 靜字

主事 武見 喜三

グイロの遺稿集

黒田孝雄

晩年ナンガバルバートに全身を傾倒しつひにこの山に悲傷の最期を遂げた、グイロ・ヴェルツェンバッハ（一九〇〇—一九三四）を追憶して、彼をめぐるAAVMの同志が協力編輯した彼の登攀記である。

本書は全部がグイロの筆に成るものでなく、彼自身の筆になる紀行文の間には適切にグイロと同行した同志の追憶的な紀行文が織込まれ彼の活動の全貌がよく傳へられてゐる。

先づ、カール・グインの追悼の辭に初まる。グイロの山登りは、両親と共に戦争中ザルツブルクに滞在したのちに萌し戦後は中學生、若い大學生として山登りを続け、一九二一年AAVMの一貫に加はつてから眞の登山家としての生活が始まつた。そしてグイロは二二年にはすでにクレツテラーとして完成した。かくして、カルクアルペンとホーエタウエル

ン彼の生涯の山として毎年親しんで居り、グロースグロックナー、ウェツターシュタイングベルグ、カイゼルグベルグに、幾つかの初登攀記録を残し、晩年にはまたドミミテにも入つてゐる。本書第一部はクラウスの筆によつて「岩場に於けるグイロ」がゑがかれ、一九二三年頃

のシュツセルカールシュビツツエ登攀記が集録されてゐる。第二部は先づバンによつて一九二三年のモンブラン行が敘せられてグイロの筆によつて「最初の西部アルペン行」彼として最も印象深い、楽しい登攀記が輯録されてゐる。マッターホルン、ダンデラン、モンテロザ、フィンステルアルホルン、ビツツベルニナが出て来る。

第三部は、カール・グインが「氷に於けるグイロ」を序し、グロックナー、グアリス、モンブラン、ベルナーオーバーランドに分たれて、彼の多くの登攀記が輯録されてゐる。

この第二、三部はアルペンに於けるグイロの氷と岩との闘争記でありその間には輝しい初登攀記録も含まれてゐる。ダンデラン東稜及西稜、ブライトホルン北壁、エギュー・ノアル・ド・ベテレ南稜上の三四二〇

米の點（これはフランス人によつてボアン・ウェルツェンバッハの名が與へられた。——二六年のこと）エギュー・デ・グランシャルモー北壁、グロースファイシエルホルン北壁、グロスホルン北壁、グレッツェルホルン北西壁、ネストホルン北壁、ビツツバネコ南稜——「グイロの十四

年間に登つた頂は九四〇座を越へやう。そのうちで四千米級の頂は七十二座を算する。五十の新登攀、そのうち三〇は岩、残り十は氷と岩との登攀であつた」とクラウスが云つてゐる。氷の世界にグイロがかゝる輝かしい記録の數々を残したのも、一人のよき先輩ハンス・ブアンを見出し彼と共にその技倆を磨いたことに與つて力がある。一九二五年、學校生活を終へた彼は、ドイツ鐵道省の試験であつたが、傍らAAVMの先頭に立つて同僚の養成と啓蒙に盡した。しかし、二六年の秋左肺をわづらひ、半歳もスウィスに保養した。二七年には漸く恢復し、再び健康な姿を山の世界に現はした。二八年バミール遠征の計畫が進められ、グイロも参加を薦められだが、病後のためと、國家試験のため、遂に参加ができず、この年は勉強と病後の手當に送つて了つた。その後、彼の病氣も全く恢復し、三一年にはメルクルと共に、三晝夜の間グランシャルモ北壁にひどい吹雪と悪闘し、遂に初登攀の記録を残したほどであつた。

本書第四部はベヒトルドの手になるナンガバルバート記である。その計畫はもととグイロの提案であつたが、三二年の第一回には職務上の關係で、彼は参加できなくなり、メルクルにその遂行を委ねた。三四年の第二回には、メルクルにリーダーを委ね、彼自らは一員として、参加

しつひに第七キャンプに、あの悲愴な最期を遂げて了つた。ラシュ・タクティクなどかなり登山界に物議を醸したこの登攀であるが、とまれ人夫をかばひつゝメルクルと共に最後までこの山にふみ止まつたグイロの行爲、その美はしいドイツ人とヒマラヤ人夫との協力にヤングハスバンドも、將來へのよき教訓であると述べてゐる。

本書には、最後に著作目録が添へてゐるが、四十七面の寫眞は、何れもグイロの面目躍如たるものがある

細井吉造君の遺稿集

亡き細井吉造君の遺稿集編纂の計畫が故人の友人の間に進められてゐる。内容は紀行、隨筆、評論に互り掲載雜誌の種類も十餘の多きに及んで居り、その數も百有餘、年代的には昭和六年から十一年に至る五ヶ年間のものである。一冊の文集とすれば紙數もおのづから限られることであるから、これ等總ての文章を一つ残らず收録することは、不可能であらう。従つて相當取捨しなければならぬことと考へられるが、筆の人であつた故人を遺稿集の形で記念することの出来るのは、故人を失つた損失を償ふには足りないとしても、矢張り大きな喜びである。遺稿集は來年二三月頃上梓の豫定である、

山岳圖書展覽會目錄別冊

定價 並裝 五十錢（送料）
上製 壹圓（四錢）

「山岳」合本用表紙

- 一、上質バツクラム（灰青色）
- 二、背、山岳第何年西曆を押す。
- 三、ビラは兩面に會章を押す。
- 四、前後見返し茨木畫伯筆。
- 五、一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢（送料本會負擔）
- 六、雜誌を本會へ送附される場合製本料共一圓（返送料本會負擔）

「會報」綴込用表紙

- 一、ビラは濃綠色レザリ、會章押捺
 - 二、背は濃紺色クロース。
 - 三、代金四十錢（送料本會負擔）
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さい。

「會報」合本

- 一、一號より五十號までの合本表紙出來。
- 二、體裁會報綴込用表紙に準ず。
- 三、代金一圓（製本料、送料共）

振替口座東京四八二九番

◆會員通信◆

山案内佐伯八郎君の死と其前後事情

十五日の午後六時頃某所で、富山高専學校教授石井、今村兩氏の天然記念物功勞者表彰祝賀會に列してゐると、家から電話で「佐伯八郎君が山の工事場で死んだ」といふのである。其席には山の同好者も相當居られたので取あえず其由を話した處皆びつくりなさつてゐた。翌十六日朝郊外の工場で仕事中心ツコリ平藏君がやつて来て、葬式の案内狀の文面を見て呉れといふから愈々間違ない事が判つたのである。其れ迄は何だか半信半疑であつた。文面では八郎が死んだがあの遺兒動に引續き愛顧を願ふといふのであるが如何にも可愛さうでならない。私はしかし通知は通知止に止め後に出す返禮狀に右旨を書入れる様訂正し、二通りで三百枚刷る手續した。平藏は待つてゐて富山ですぐ投函迄すまし、更に手執ぎ寺の川事もするのである。

私は登山者彼は山案内といふ關係に止まるが家業も打やつて午後一時五分で千垣に向ふ事にする。服装は勳君の身をもつて軍服とし軍服の上から供物の籠を背負つて三時近くに同家に着く。

一通り見舞つた頃俄に妻女が號泣しだしたのは私も思はず誘はれた

何分二十年近くの山友達で此邊では五六回も泊つた事であり、私も山で死ぬなら相手は八郎であつたらうし、可愛相で可愛相で涙と激情の防ぐ方法がない。(この感情は外にもたくさん懷かれた方があつたでせう、私ひとりでは、こんな事申して御許し乞ふ)

間もなく現場請負者「鐵道工業」の會計課長が災害扶助金、埋葬料三九〇圓を呈しに來られた。同氏が辭去されてからどんな怪我だつたか聞き死體も見せて貰つたが一部新聞に出て居る様な溺死ではなく、十四日午後七時頃(同地降雪あり)ハツバの割れ石にて前頭部を挫き、頭蓋骨が三四片になつた模様である。鮮血は縋帶を通し咽喉から上は丁度「お米さん」(縫ひぐるみ人形の事)の様にぐるぐら巻きに包んであつて包みを取る事も出来ない。この即死事情は私には判然出來なかつた。墜落か顛倒か、彼單獨であつた事と同夜は歸らぬ儘に「彼の事だ夜でも夜中でも歩く事の平氣の男だから其内には来る」と工事場でも安心してゐたとの事、十五日朝俄に搜索して發見急報したのもらしい。同日午後六時頃死體は家に着いた由である。

勳君は昨年暮梅村部隊(歩三五)初年兵として渡滿し、去る十一月八日留守隊委員として凱旋、同日は富山驛前の面會所で私の弟(私も弟も郷軍幹部)が八郎父子を見た由であるが、勳の凱旋は同家の事情上大い

によかつたのである。八郎は其日すぐ歸村。翌九日登山したので勳の慰勞休暇十二日より十五日迄の處、八郎が十五日歸宅凱旋話聞かうとしての遭難か否かはこれ又私には判らない。八郎は其性格至つて淡泊運命まかせ流であるが、妻女は入營渡滿の時よく慰撫を云ひ、早く除隊したいばかりに血の出る思ひをして青訓へ出したことも訴へた事を覚えてゐる。御承知の方もあらうが同女は産後が元で六七年間も身體の自由を失つて居り、長女は長女で盲目で誠に同情に堪えない家庭である、同家の隣りは福松の家で廣嶺には此種の家が相當出來た。

故人の寫眞や遺品を調べてみると案内人手帳を出して二男の明がお父さんはこれを一番大切にしてみたと語る。成程知名の士高位高官の署名があり誰も皆八郎の人柄を讃へてゐる。平藏は男役、八郎は女房型、行軍間よりも宿營間に役立ち殊に僕など朝三時四時出發して何一つ不平なく手違ひなく彼と過せたのは、絶大の追憶であらう。小さな非力な彼が夜の目も眩ずに薪水の勞や濡れ衣を干すのは實にいたゞしい。それでゐて歩き出せば相當輕口や冗談を飛ばすので、彼と歩けば淋しみは全然ない。其外相當の年であるので信頼されて婦人の登山老人の案内に恰適であつたのである。全國に彼に案内された婦人は頗る多い。

川田順氏の筆蹟一節

「立山郡峯の難成者八郎を先達として生涯の記念に値する登高をなしたり、

立山はあらか岩山岩の秀に

石つみ上げてほこら据ゑけり」

四時近く同家を辭し佐伯靜男君を訪れ事情を聞き又後事を依頼して、一汽車後れて下車し叩問された富山高校内山氏と連れ立つて歸途について。銀嶺には夕陽に映えて白雪輝き事件の地有峯入りの和田川溪谷は今や紅葉の眞盛りである。さて都人の山行は愈々盛んにすゝめ度く、山村の荒廢は何によつて救はれんとするか。山はよい處である、きつと立派な人々が往て住み、山の人々もよくくらしを送れる様になしたいものである。(石黒清藏)

鹽島鑑司君の死を悼む

嘉吉、菊十、磯吉、廣太郎など云ふ草わけの案内人に次いで、白馬山下の四ツ谷のガイドで、中堅を爲してゐたのが鑑司等であつた。その中で鑑司は誠に親切な質實な、併もしつかりしたよい男であつた。

嘉吉、磯吉の兩君は、唐松方面から八峯のキレットを越して、鹿島槍ヶ岳への登山路を拓いた。菊十は三枝君と共に、最も早く五龍岳へ登つた者、五龍岳の名はこの時に命名された、廣太郎は白馬岳から祖母谷へ最初に下つた者で、その中で、菊十はナダレに押されて死し、廣太郎は病没した。他の元老連は今も生存してゐるかどうかは私は知らない。鑑司はまだ四十九歳、最近まで重荷を背負つて盛んに登山してゐた。去年あたりから胃腸を損じたに聞いてゐたが、この八月三十一日に死去したと云ふ報に接した。白馬山下には、今日では若い良いガイドが大分養成された。併しその中堅をさへてゐた彼をなくしたことは、誠に物淋しい感じがする。彼も亦名ガイドとして、我々登山家の記憶に残るべき資格を持つものと思ひ、彼の冥福を祈りながらこゝに筆をとつた。(冠松次郎)

木暮會長を迎へて

北大山岳部創立十周年紀念講演の爲、來札された木暮會長を迎へて、十一月二十五日夜、大通ときわに於て、在北海道日本山岳會々員の有志晚餐會を催しました。會長を中心に歡談數刻夜の更けるを忘れて、散會したのは十二時近くでした。會する者、木暮氏を始め、中野征紀、伊藤紀克、石橋正夫、水上定一、西村正岡彦一、小林正、四手井綱彦、渡邊武男、山崎春雄、豊田春滿、大飼哲夫、初見一雄、大木長藏、佐々保雄の十六名。尙ほ之を機會に今後同じ様な集りを時折催したり、又年に一度位は東京から誰方來て頂きもし、或は來道される會員がその旨御通知あれば皆で集つて、御飯など共にするものもいゝ、など云ふ意見も出たことでした。(佐々保雄)

山岳語彙の蒐集に就て

研究部

山岳語彙の蒐集は、古い「山岳」を御覽になればお分りになるやうに會としてかなり古くから行つてゐました。「山日記」が發刊されてから會員からの御希望もあつて、三年目から「山岳語彙」をのせました。これには會員並會員外の諸兄の御支持を得てあれだけのものを纏めて見たのでした。しかし、種々考へた末「山日記」ではどうしても紙面の制限から語彙の説明が充分出来ないで、中途半端なものとなり、充分の効果を擧げ得ない爲、三年位前から「山日記」から削つて了つたわけでした。しかし、會員からも復活しろといふ切な希望もあり、外國語彙だけ取敢へず今年度から復活したのであります。我國の語彙はまだ削つたまゝなのです。山村語彙、山岳語彙等の古い文化は、とかく今日失はれ勝ちです。殊に交通網の發達は、更にその傾きを甚しくするやうで、各地特有の語彙も、相互に交渉し合つて、その地に特有なもののは失はれ、他の地方に移る傾向が多分にあるやうに思はれます。かゝる傾向の甚しくならない今の内に、方言が割合に純粹に保存されてゐるうちに、どうかして、山岳語彙を採集蒐集して置きたいと考へて居ります。

それについて、今回會の永年の懸案であるこの仕事に着手することになりました。そして先づ山岳語彙を採集することにし、今度「山岳語彙採集帖」なるものを編輯し、今月十五日頃、この會報と前後して會員諸賢の御手許に御送り致すことにしました。

登山された地方の現地に於て「話し手」を決めてそれについてありのまゝを記入されるのが最も好ましいのであります。しかし過去の山登りで採集し、「山日記」やノートに書き止めて置かれたものも是非記入して頂きたいのでありまして、この場合項目毎に採集地を明記されることを望んで居ります。

何分にも限りある餘白で、充分記入して頂くには窮屈と思はれますが、各項目の上に附けた番號を生かして別紙に御記入下されば最もよいかと考へます。尙、記載項目以外についても勿論御記入は差支ないわけですが語彙は我々が口で云ふ通りにカナでうつして頂きたいのです。

御報告の締切の期限は別に定めて居りません、充分採集報告の御出来になつた時を見計らつて次から次へと整理致して行かうと思つて居ります。

尙この仕事に特に興味を有せらるゝ篤志家を御紹介下されることは私達の大きな喜びであります。

「採集帖」は御申越次第御送致しますが、部數に制限がありますから

充分なる御希望に副ひ得ないかと考へます。これを一つの規準として、前述したやうに別紙に報告下さるものが最もよい方法ではないかと考へます。

「採集帖」は四十八頁のもので内容は

- 地形に關するもの (六〇)
- 天象に關するもの (五四)
- 動植物に關するもの (二九)
- 用具に關するもの (三三)
- 行爲に關するもの (二九)
- 牧畜に關するもの (一二)
- 雜 (一三)

其他附録として狩人等の山言葉、狩に關する方式習俗、川魚漁法、假小屋の作り方、焚火の作り方、樵夫の俗信、山での特殊な食ひ物、藥用又は有毒植物、氣象觀測等です。山岳語彙ばかりでなく附録の事項も御遠慮なく御記入下さることを希望して居ります。

これらの整理は會員篤志家によつて行ひ、適當の方法で報告致します。この結果を「山日記」にも抄録致したい豫定であります。

尙この仕事について何か御氣附の點がありましたら何はせて頂きます。山岳文化事業の一端としてのこの仕事の意味を御汲み取り下さいまして會員諸氏の多大の御支援と御助力とを仰ぐことのできるやう終りに切に希望して居ります。(TK記)

◆新刊紹介◆

登高行 第十輯 (一九三五年度)

慶應山岳部發行

積雪期高所露營の補遺として(小森宮、玉木、岩田、相馬)カンチエンジュンガ登攀史抄(金山)山岳氣象考察の一斷片(濱口)須藤經之助君の憶ひ出(久)及び記録吾々の學生時代から登高行の年報欄はつきせぬ興味の泉だつた。大島氏其他諸氏の洒脫なジョクティングは立派な記録と共に心を山に向けた者の憧れであり同時に話題の中心でもあつた。この登高行の記録欄がその例に洩れず、否以前にもまして興味深かつたのは嬉しい。記録の中の谷口氏の言や編輯委員諸氏のいふ九ボより六號を重視した結果はたしかに好ましくあらはれてゐる。

らず、それ以外には學生がかゝる雜誌を發行する妥當性を見出し得ないたゞ學生登山が登山界の指導的立場にあつた時代には山岳部の反映としての部報も公の山岳刊行物として登山界に指導的地位をとり得ただけなのである。この場合部報のもつた啓蒙的機能は本文の記事に主としてあらはれた。

併し今は事情が一變した。登山の舞臺は外國高山岳へ擴がり、其最も活動的な登場者が學生であるとしても既に仕事は一つの山岳部を獨立的單位とするには大きくなりすぎた。部報の不振はこゝにある。その本文の無味乾燥もこゝに胚胎してゐる。今や部報が永くリダブルなものとして生命をもち得るためには山岳部の忠實な反映といふ原型に戻らねばならないのだ。今までの反映としての機能を主として果したのは記録欄だ。今まで本文がもつた指導的役割を演ずるためには部報は他のものに轉化されねばならず、その場合部報の反映的機能が維持されるかどうかは疑しい。私はむしろ部内雜誌的の、といつても眞摯な登山グループの歴史、活動、氣分を登山界に傳へ得るに充分な、部報の持續を望むのである。この場合、記録欄は當然より重視され、それに従つて本文のこの目的に沿ふ編成替も行はれるに違ひない。登高行を紹介するに當つて特に記録欄についてのみ述べたものこのためである。

若干附け加へれば、これからの部報の記録欄はまづ飾りのない赤裸々な山岳部の反映であつて欲しい。記録に附け加へて或ひはよくある様な随想欄でもいい、部員の意見や討論も遠慮なく發表されることが必要だ。有益な研究を發表しない事自身が既に罪惡なのだから。と同時に今までよく見た様な獨りよがりの内輪話や、下等な樂屋落は整理されねばならぬ。お互にこの方面に努力する事によつて本文の問題も有機的に解決される。外國アカデミカーが出してゐる報告もよい參考になるに違ひない。

登高行第拾輯はこの方面への前進を見せてゐる。勿論考へられる最良のものではないかも知れない。だが今までの部報や、それに對應して現れた諸部内雜誌から見れば確かに一歩前進である。

茲に紹介しからざる紹介だが、編輯者諸氏の意見に共鳴するの餘り平常愚考してゐた所を述べた次第である。(I.T.)

ウム・デン・カンチ

慶應山岳部員有志譯

登高會版

パウアーの第一書 Im Kampf um den Himalaja は既に數年前、會員伊藤氏によつて譯されて居るが、その第二書 Um den Kantsch が慶應山岳部員有志の手によつて、抄譯されて居たものが、今夏角本郷氏に

よつて、校訂せられて登高會から刊行された。

本論たる紀行編だけの譯出ではあるが、附録としてハルトマンの報告になる生理的考察の一章を加へて居る。パウアーの小氣味のよい簡潔な表現が、かなりよく邦語に移植されて、この隊の力強さを傳へて呉れる本文一〇四頁、附録二四頁、原著から行程概念圖とツェム氷河上部の地圖を複製して居る。

ヒマラヤを目指して部員連がこのやうな文獻にも努力を傾注する眞剣な態度から生れた副産物としてこの書は廣く讀まれていゝ。



會務報告

役員總會並十一月定

例理事會

十一月十九日午後七時於本會事務

所 出席 木暮、松方、島山、逸見

三田、島田、磯野、横、櫻井、冠、

小島、高頭、武田、飯塚、角田、黒

田、木村(以下委任)今西、中屋、

三木、今村、

役員總會

一、理事改選ニ關スル件

理 事 會

一、會員細井吉造氏葬儀報告。

一、山岳第三十一年二號編輯報告

一、年次會員大會ノ件

一、臺灣山岳會十周年記念會ノ件

一、關西支部近況報告

一、一九三七「山日記」編輯準備ノ件

代表者變更

札幌市北海道帝國大學文武會山岳部
代表者 鈴木 限三

會員計報

東京市 小倉伸吉氏(明治四十年二月入會、會員章番號一一三)

昭和十一年十一月一日逝去せらる

東京市 細井吉造氏(昭和十一年一月入會、會員章番號一六二三)

昭和十一年十一月四日南駒登山中遭難逝去せらる

本會は右兩氏に對し茲に謹而哀悼の意を表す。

新着圖書

ケルン十一月號 同 編輯室

山小屋 同 朋文堂

寫眞月報 同 小西六本店

野鳥 同 巢林書房

ツリスト 同

ジャパン・ツリスト・ビューロー
地學雜誌 十・十一月號

防災科學 四作 東京地學協會

九州山岳大觀 岩波書店

東京山旅俱樂部報告 第一、加藤數功

京都帝大スキー部々報 第一、

門鐵小倉工場山岳部報 第二、

登高行 第一〇 慶應山岳部

ウムテンカンチ 同 登高會

The Geographical Journal

Oct. 1936

La Montagne Oct. 1936

Natural History Oct./Nov. 1936

Die Alpen Oct./Nov. 1936

Sierra Club Bulletin Aug./Nov. 1936

The Prairie Club Bulletin Oct.

Trail & Timberline Sep./Oct. 1936

Appalachia Oct./Nov. 1936

Bullet D'I Centre

Excursionista Ago./Oct. 1936

The Mountaineer Oct./Nov. 1936

Bulletin du Club Alpin

Tchecoslov. que

Sep./Oct. 1936

Mountaineering Journal

Sep./Nov. 1936

Revue Alpine 4e Trim. 1936

De Pergés Oct./Nov. 1936

Unione Ligure Escursionisti

Settembre 1936

Club Alpino Italiano Set. Oct.

S. T. F. Oct. 1936

關西支部來室者數報告

關西支部室昭和十一年十月末までの來室者數を備付の署名簿によつて調べたところは左記の通りで、延人員は合計四八八名にのぼります。うち會員三一四名、會員外一七四名で月別に見れば漸増を示してゐるとはいへなほ關西在住會員で顔の見える方も少くありません。支部は大阪堂ビル、筋向ひの大阪貯蓄銀行三階、(入口北側)にあり、比較的便利な位置にあることですから是非立寄つて頂きたいと思ひます。遠地の會員の方も御來阪の際は是非お訪ねを願ひたく、開室時間中は必ず誰かをりますうが、豫め御一報下さればなほ結構であります。

十月までの登山團體集會利用率は奈良山岳會、關西學生聯盟など數回にわたつてゐますが、これも開室時間外の御利用に對して十分の御便宜をお計りするつもりですから御遠慮なく御申込下さい。収容力は二十名程度です。

關西支部來室者

月	數	月	數
一	四三	六	五七
二	二三	七	六〇
三	二九	八	四三
四	二一	九	五五
五	三六	一〇	一一
		一一	二一

立教遠征隊歡迎晚餐會

六八六七メートルのナンダ・コット初登頂をなしとげた立教大學山岳部のヒマラヤ遠征隊堀田彌一、山縣一雄、湯淺巖、濱野正男の四氏ならびに大付特派員竹節作太氏一行の歸朝歡迎晚餐會は昭和十一年十二月一日午後六時半から關西支部主催のもとに大阪堂ビル清交社において開かれた。五時開會の案内であつたため遠路參會の方には御迷惑をかけることとなつたが、乗船あふりか丸の神戸入港が遅れたので致し方がなかつた。悦びの上陸第一歩の食事をともにする好機を與へられたのは大阪毎日新聞社と立教大學山岳部のお骨折りによるもので感謝しなければならぬ。

會は主客あはせて六十一名にのぼる盛況で、まづ三木理事の歡迎の挨拶をもつて開宴、和氣瀧々のうちに山幸を祝福、デザートに入るや辻莊一氏立つて立教大學山岳部長として計劃の由來と謝辭をのべ、次で堀田隊長から遠征の行程大要と感想談があつた。これに對して大毎の石川欣一氏、京大の木原均氏、評議員の榎谷徹藏氏からそれぞれの立場よりの祝辭があつて最後に大朝の藤木九三氏により一行のために乾杯が行はれた。日本として最初のヒマラヤ登攀隊を迎へたことでもあり話は彼これと盡ききうもなかつたが、別室では關西學生聯盟の座談會が用意されて

ゐるので、早々に宴を閉じなければならなかつたのは洵に心残りであつた。しかし幸にも學聯の方々の好意によつて有志の會員はその會を傍聴することができ、この席では地圖を示しての状況報告を湯淺氏から、學聯側の各種の質疑に對して山縣、堀田兩氏からの詳しい説明と見解のあつた。當日の出席者は主賓一行五氏のほか辻部長、逸見理事を招き、左の顔ぶれであつた。(次第不同)

榎谷 徹藏 木原 均 平吉 功
今西 壽雄 岡本治之助 前田 光雄
田中 薰 渡邊 小兵衛 高岡藤兵衛
喜田清左衛門 梅津 猛林 並木
富田 健一 柏岡 英男 名古屋常治
中原繁之助 住澤梅太郎 阿江 正造
鍋倉 英夫 金井 健二 高橋勇二郎
米澤 牛歩 諏訪多榮藏 若城豐次郎
別宮 貞俊 國府 精一 野田(俊)五郎
杉本 俊二 加納 一郎 淺井 東一
茨木猪之吉 岩田 正俊 秋田 高吉
下川 友記 山口季次郎 小川正十郎
加藤 泰安 宮崎 武夫 三木 高岑
石川 欣一 今西 錦司 津田 武臣
津田 周二 山本 正成 三好 毅一
高橋 貞三 西岡 一雄 松井久之助
藤木 九三 坂岡宗保 志金谷 簡二
安藤 博 石原 正直 田中終一郎

『山岳』三十二年第二號主要目次

(約三百頁の豫定)

兩極探検の思ひ出 白瀬 轟
(附) 千島の沿革 同 右
植物の垂直分布に就いて 今西錦司
本邦水河問題の回顧と現狀(中編)

五月の北千島 岡山 俊雄
白馬の南段 入江 保太
山岳通信の實績 田口 一郎
飯豊の大又澤 飯沼 潔水
富谷より藥師へ 吉澤 一郎
小鎗の西壁登攀 京都府醫大
氣象に關する俗信解説 菅原 芳生

新版日本風景論

待望の『日本風景論』新版が近く岩波文庫の一つとして出版されることになつた。編輯は小島島水氏、氏の序文が添えられる筈であるが、文庫で星二つといふから、定價は四十錢である。何しろあの小さい版に縮めるので、志賀さんの原著の大きな特色をなしてゐる挿畫は、とても澤山は入らないといふことである、それでも日本に於ける木口木版の末期の代表的作品としての面目の幾分かは傳へられるであらうと思ふ。

牧之の『北越雲譜』ウィムバーの『アルプス登攀記』などと並んで志賀さんの名著が文庫に收められ、よい山岳ものが進出して行くのは喜ばしいことだが、英國でも、ステイ

グンの『アレイグラウンド』やマムリーの『アルプススコカサス登攀記』などが最近盛んに複製されつゝある事實と思ひ合せて興味深いものがある。(S・M)

◆事務所から

□住所の變更は御通知下さい。
□會費お拂ひ込み未済の方はなるべく早く願ひます。
□會員通信は事務室内會報掛宛に願ひます。その他の會報關係の通信も同じく。

◆會報投稿規定

◆原稿締切毎月五日
◆原稿用紙は十六字詰のこと
◆本號第三頁のやうな斷版的想片、或は會員通信等を物に希望致します。
◆原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。

昭和十一年十二月十五日印刷
昭和十一年十二月二十日發行

發行所 松方三郎
編輯者 逸見眞雄
印刷所 東京市小石川區戸崎町一三
東京市芝區琴平町一(二丁目ビル)
發行所 日本山岳會
電話 芝一六四九番
廣告一手取扱 電話 四六五四番